

スラウェシ市民通信(6) -- バワカラエン山の守り人、ダエン・マンドン (連載)

著者	Akbar Abu Thalib, 松井 和久[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	143
ページ	43-46
発行年	2007-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00047116

バワカラエン山の守り人、 ダエン・マンドン

アクバル・アブ・タリブ

バワカラエン山を愛するあまり、ダエン・マンドンは、この南スラウエシ州ゴワ県にある山岳地帯の環境保護に人生のすべてをかけてしまった。インドネシア独立記念日のお祝い気分のなか、筆者は彼にインタビューした。山の守り人の報酬として毎月一五万ルピアをもらっていることなど、様々な面白い話を聞くことができた。

●独立記念日の喧騒から離れて

二〇〇六年八月一七日木曜日の夜。南スラウエシ州ゴワ県マリノの住民は、六一回目のインドネシア共和国独立記念日を迎えたこの日まで、お祝い行事を一週間も続けて楽しんできた(訳注1)。

ここでは、インドネシア各地で通常行われるような様々なアトラクションが催された。せんべい(krupuk) 食い競争、棒登り競争(Pantjat pinang) (訳注2)、その他の催し物である。夜になると、歌や踊りの演芸会が開かれた。マリノのサッカー場には縦四メートル、横六メートルの演台が設けられ、毎年のことだが、とても騒々しい恒例行事が行われる。住民は次々に壇上へ上

がって歌や踊りを披露する。ポップス、ダンドウット(訳注3)、ロックを歌う者もいる。もちろん、独立闘争を称える詩を朗読する者や民族歌を歌う者もいる。

住民は、このお祝い行事を心底楽しんでる様子だった。競争に次ぐ競争、催し物に次ぐ催し物、みな笑いと拍手に溢れていた。喧騒のなかで、ときおり、ちよつと乱暴気味な口笛が聞こえたりした。

しかし、そうしたお祝いの喧騒から遠く離れたバワカラエン山のふもとでは、山の自然の静けさのなかで一人の初老の男が黙ってたたずんでいた。あたかも、マリノに集まって独立記念日のお祝いを楽しんでい

る他の住民と一緒にいるよりも、山から吹き下りる風の音に耳を傾けているほうが楽しいかのようにであった。

この褐色の皮膚をした男は、たった一人で、バワカラエン山のことをひどく心配していた。彼によると、わかることはただ一つ、バワカラエン山が今とても危機的な状態にあるということだった。

「村の奴らがかわいそうでならんのだよ。誰もバワカラエン山のことなど気にする者

はいない。ところがこの間、大きな地滑りが起こった。また大きな地滑りが起こるのではないかと気になって怖いのだよ」と彼は語る。

●山の守り人、ダエン・マンドン

彼の名はダエン・マンドン。年齢はおおよそ五〇歳ぐらいであろうか。この三〇年の間、彼はバワカラエン山の自然環境を守るために人生を捧げてきた。

毎日、ダエン・マンドンはこの古い山の斜面に苗木を植えるのを日課としてきた。彼が植えるのはマホガニー、チーク、その他の硬木の苗木である。植える前に、それらの苗木は彼の家の周辺であらかじめ育てられている。これまでに一体、何本の苗木を植えたのか、正確に覚えてはいない。おそらく、何千本もの苗木を繰り返し植えてきたことであろう。

この努力の報酬として、彼はゴワ県林業局から毎月一五万ルピア(約二〇〇〇円)の謝礼をもらっている。これはどうみても十分な額ではない。しかし、ダエン・マンドンによれば、衣服や食料といった生活必



バワカラエン山の守り人、ダエン・マンドン
(Winami 撮影)



地滑りで埋まった場所からバワカラエン山を望む
(Winami 撮影)

需品は、たまたま彼の家に泊まった登山者らがよく置いていくってくれるそうである。ただし、生活必需品が急に必要になることもあるので、週に一度、マリノの市場へ買い出しに出かけるといふことだ。

苗木を植えるほかに、彼は、その多くが自然愛好家グループに属する登山者たちと話をしながら夜の時間を過ごすことがよくある。彼ら登山者の多くは若者たちだが、ダエン・マンドンは、登山中は環境美化と登山の態度に気をつけるよう、若者たちに助言することがしばしばあった。

毎朝、苗木を植える前に、ダエン・マンドンはランマ谷の最も高い場所であるタルンの頂に登る。そこから彼は、自然の変化が起きているかどうかをみるため、山の尾根の連なりを眺める。「タルンに登れば、バワカラエン山で起こった地滑りの跡をほぼすべて見るができる。地滑りが起こった方向も見ることができる」といふ。

●三二人が犠牲になった地滑り

ダエン・マンドンは語る。二〇〇四年三月二六日金曜日の昼に起こった地滑りの出来事を決して忘れることはできない、と。

当時、マリノから離れたティンギモンチヨン郡マニンバホイ村のレンケセ集落では、一〇〇人以上が水田で耕作していたが、そのうちの三二人が、突然の地滑りで土に埋まって亡くなった。大量の土砂が数百ヘクタールの水田を覆いつくし、集落の家や学

校の建物を埋めてしまった。

地滑りが起こる直前、レンケセ集落の住民はちょうどイスラームの金曜礼拝を終えたところだった。男たちの大半は、礼拝から家に帰るとすぐに水田へ向かった。他の者たちは牧草地に牛を連れて行ったり、家で休んだり昼食をとったりしていた。

住民は水田耕作を待ち望んでいたのだった。実際、それまでの二週間は激しい雨が降り続いていた。だから、久々に晴れたその金曜日を無駄にしたくなかった。収穫期を迎えようとしていたのである。

誰が一体、想像などできるだろうか。この後すぐに、集落や水田や畑や家畜、そして自分の愛する家族や自分自身までもが地滑りで土に埋もれてしまうとは。自然が示す前兆はなかった。いや、実際には兆候はあったのだ。山肌から土が少しずつ落ちていたのだが、そのときにはそれが兆候だとは読めなかった。そして、その数分後、バワカラエン山の山肌から山裾までが一気に崩れ落ち、何もかも、すべてを埋め尽くしてしまったのである。

マニンバホイ村はバワカラエン山の山裾の谷間に位置し、村の左側と右側をジェネベラン川の上流が流れている。ダエン・マンドンは、危険な兆候をすばやく村人たちに知らせることができなかったことを残念に思っている。彼は、早足でマニンバホイ村へ向かったのだが、長さ三〇キロメートル、堆積の厚さ四〇〇メートルにも達した

大規模な地滑りの発生で、行く手を遮られてしまった。地滑りが起こる直前に、彼は非常に激しい爆音を聞いた。その爆音はバワカラエン山の山肌の下部分が崩壊した音のような気がしたのであった。

●たった一人でランマ谷に住む

ダエン・マンドンは今、ランマ谷に住んでいる。そこは山裾の最後の村であるレンバンナ村からさらに離れた場所である。レンバンナ村からランマ谷に至るには徒歩しか方法はなく、それもおよそ五時間を要する。ランマ谷へ向かう道はとても険しく、両側がマツに覆われていて道幅が狭い。その隔絶した場所は、バワカラエン山の丘や山並みに囲まれた谷間にある。

ダエン・マンドンの環境保護への関心はとても高い。環境に対する全般的な関心を持ち続けるために、自分の村であるタカツパラ村を離れてランマ谷に住むことを選んだのである。一〇年前、新しい場所へ移るときに、一〇〇人以上の村人たちが彼を送っていった。それどころか、彼の住む高床式の家も、分解した後、新しい場所へ運ばれたのである(訳注4)。

その高床式の家は縦四メートル、横三メートルである。家のなかには客間、客間と一体になった台所、縦二メートル、横一メートルの寝室、の三部屋がある。ダエン・マンドンが何かを料理すると、炊事の煙が家のなかに充満するが、割れやすい板壁の



ランマ谷のダエン・マンドンの家 (Winami 撮影)

合間から外へ流れ出していく。

高床式の家の高さはさほど高くない。やや厚めの板で作られた床は、土からわずかに一メートル程度しか離れていない。もともと、一〇年ほど前から飼っている三匹の犬にとつては十分な広さの部屋である。三匹の犬はいつもダエン・マンドンの傍にいますが、夜には、野生のイノシシが家を襲ってこないように見張っているのである。

この谷から、ダエン・マンドンはまた山の斜面を歩く牛追いの動きも監視する。ときには、山裾にある様々な村から来る牛追いが牛を縄でつないだり、えさを与えたりするのを、彼は手伝ったりもする。

ダエン・マンドンの存在は、村人にとつても有意義なものである。なぜなら、山裾付近に住む村人たちの生命の危険を脅かすような自然の兆候が起れば、彼が村人たちに初期情報を伝達するからである。その情報に基づいて、村人たちは農作業や牛追いを続けるか、それとも止めるかを決定しているのである。

村人たち以外に対しても、バワカラエン山の登山者に何か災難が起れば、ダエン・マンドンはすぐに即製のレスキュー・チームになる。登山者が道に迷ったり、崖から落ちて死亡したりするような場合である。マカッサルのある私立大学の自然愛好学生会の会長は、彼のチームが二〇〇二年に口エ谷で崖から落ちた仲間を捜索したときに、ダエン・マンドンにとつても世話にな

ったという。「信じられなかった。たった一日で、タタ・マンドンは友人の遺体を探し当てたのだから」と彼は言う。

登山者たちは、ダエン・マンドンを呼ぶときに「タタ」(Tata) という呼び名をよく使う。マカッサル語で「タタ」は「おじさん」という意味である。彼をそう呼ぶことで、登山者たちは、ダエン・マンドンに尊敬と親愛の情を込めているのである。

●別れた妻子を思いつつ

バワカラエン山の状況についての話のほかに、ダエン・マンドンは心に引っかかる大きなことが一つあるという。すでに一〇年経ったとはいえ、彼は妻と子どもをまだ思い続けている。一九九六年、ダエン・マンドンは苦しい現実を受け入れなければならなかった。妻のマニアが夫との離婚を申し出たのである。家族は貧困のどん底にあり、彼女は一緒に暮らすことに耐えられなくなったからである。

苗木を植えるダエン・マンドンの仕事の報酬は、家族を養うのに到底十分ではなかった。妻のマニアはとうとう一人娘のファティマを連れて、マカッサルへ出て行ってしまった。この別れが、実はダエン・マンドンのやる気にさらに火をつけた。同じ年に、彼はタカッパラ村を離れて、ランマ谷に一人で暮らすことを決めたのである。

現在に至るまで、ダエン・マンドンは妻子の行方を知らない。「時間があれば、二

人を探しに行くのだが……」と語るこの男は、妻子への愛しい気持ちと心を秘めながら、バワカラエン山の監視を続けている。

(Akbar Abu Thalib / 映画宣伝プロモーター)

(訳注1) 独立記念日を祝う行事は、独立記念日の二週間前ぐらいからほぼ毎日開催される。本文のような山間部では、遠隔地で交通の便が悪い場合、山間部に散在する集落の住民は、マリノのような中心集落に出てきて、集落ごとに固まってしばらく「合宿」し、毎日のお祝い行事に参加するのが一般的だった。

(訳注2) 油を塗ってつるつるに滑るようにした長い棒の先にお菓子や様々な景品をぶら下げ、それを目掛けて競って棒を登りあう競争。独立記念日の恒例行事で、全国各地で一般的に行われる。

(訳注3) アラブ・インド系の哀調を帯びた大衆音楽で、体を揺らし、踊りながら歌う形態を探る。歌詞が単純で、インドネシア国民全般に人気があり、飾らない庶民の音楽と受けとめられている。

(訳注4) 南スラウエシ州などで広く見られる高床式住居で、簡素なものは転居の際に解体し、移転先で組み立てることが可能である。近所の場合は、そのまま持ち上げて移動する場合もある。

〈訳者による解説〉



レンケセ集落の観測小屋。小屋の下は土砂に埋まった小学校である（松井和久撮影）

筆者のアクバル・アブ・タリブは、現在ジャカルタ在住で、全国各地をまわって映画の宣伝を行うプロモーターを務める。

本文でも触れられたように、ダエン・マンドンが「守り人」をしているバワカラエン山では、二〇〇四年三月二六日に大規模な地滑りが発生し、現場に最も近かったレンケセ集落で三二人が犠牲になる惨事が発生した。この地滑りで、ジェネベラン川に予想を超える大量の土砂が流れ込んで川の流れを大きく変化させ、ジェネベラン川の下流にあるビリビリ多目的ダムの機能にも大きな影響を与える事態となった。

当初、この地滑りの原因は、バワカラエン山での違法伐採による保水力の低下と見られていた。しかしその後の調査で、地滑りが起きた山肌はもともと木が生えていない場所とのことで、違法伐採が原因とは必ずしもいえない面があるようだ。しかしダエン・マンドンは苗木を植え続けているのであるから、バワカラエン山で伐採が行われてきた可能性はあり、そのため、地滑りと関係のあるなしにかかわらず、苗木を植える何らかの必要性があったとはいえる。実は、地滑りが発生した付近には、約二キロメートルにわたって断層があり、その幅が広がっていることが以前から知られていた。しかし、何も特別な対策は採られてこなかった。これが何らかの原因で地滑りを引き起こしたと見る住民もいる。

この地滑りによって、レンケセ集落の人口は地滑り前の六〇世帯・約二〇〇人から地滑り後は二八世帯・約一〇〇人へと減少した。ゴワ県政府はレンケセ集落の住民を全員別な場所へ移転させようとしたが、住民の過半は集落へ戻った。そして、住民主体で自然環境変化の兆候を読む能力を高めたり、避難場所や避難ルートを確保したりするなどの対策を立ててきている。

ダエン・マンドンもレンケセ集落の住民もそうであるが、バワカラエン山の自然環境の変化を読む力が現場での災害による被害を少なくするために重要であることがわかる。それだけでなく、自然環境の変化を読む力は、田植えや稲刈りなどの農作業のプロセスを進めていくうえで欠かせない能力でもある。レンケセ集落の住民は、雨季・乾季それぞれに細かな自然環境の変化を見ながら農作業を進めている。たとえば、竹の子が地表に出てくる、ジャックフルーツの実がつくための枝が幹から出てくる、といったことなどが、農作業を進めるための合図になっている。

科学技術の発展した今日、災害予知にしても農作業プロセスにしても、コンピュータや電子機器などに頼って進めるケースが日本などでは一般化している。そして、科学技術が発展したのと引き換えに、我々が自然環境の変化から何かを読み取る能力は一段と低下してしまつたように思える。ダエン・マンドンやレンケセ集落の住民の話

を思い出しながら、そんなことを考えた。日本ならば、バワカラエン山に国の研究機関が観測所を設け、様々な機器を使って状況を科学的に把握するだろう。インドネシアにはそんな予算も設備もないので、ダエン・マンドンのような奇特な「守り人」が末端で活動するしかない。万が一、インドネシアでも観測所を設けて科学的観測を行ったならば、ダエン・マンドンもレンケセ集落の住民も自然環境の変化を読む必要がなくなってしまうだろうか。

地滑りの後、レンケセ集落に多数の科学者がやってきて、調査を行ったが、その結果は何一つ住民には知らされなかった。レンケセ集落の住民に話を聞く科学者もいなかった。現場の住民は蚊帳の外で、科学者は地滑りの現場だけを見て帰ってしまった。結局、レンケセ集落の住民は、自分たち自身で自分たちを守るために、自然環境の変化を読む力をさらに維持・向上させていく必要を感じているという。そして、ダエン・マンドンもバワカラエン山の変化の兆候を彼なりに監視し続けることだろう。

今後、ダエン・マンドンの後は誰がバワカラエン山の守り人を務めていくのだろうか。自然環境の変化を読む地元住民の知恵や能力を尊重しながらも、行政の対応も含め、災害予知のための何らかの新たな取り組みが求められてくることだろう。

（まつい かずひさ／在マカッサル海外調査員）